

どうやら僕は PROBABLY,
I HAVE ILL. FORTUNE WITH WOMEN. 女の子運が悪い!

小説 あらおし 悠
挿絵 しまちよ

立ち読み版



プロローグ 占いの館

第一章 生徒会長が僕をこつてり絞る

第二章 後輩少女の誘惑的事情聴取

第三章 後輩少女とペット契約

第四章 風紀委員のピンチと初体験

第五章 僕をペットにする女の子たち

エピローグ 僕は女の子運がいいのか悪いのか

登場人物紹介

Characters



きたがわ あ き

北川亜季

風紀委員で厳しい眼差しの子。周囲の男子も彼女を恐れており、渉は目のかたきになっている様子。



くじょうしず か

九条静花

おっとりして優美な外見の生徒会長。渉に対しても親切な振る舞いを見せる。



こ ひ な

小雛

後輩の女の子。ノリがよくて結構したか。渉のことを気に入っている。

たけはしわたる

竹橋渉

父親の急な転勤がきっかけで、女生徒が多い学園に転校することになった、本来ならうらやましい少年。

要は、見つかる前にここを脱出すればいいだけのことだ。幸い、渉を嵌めた連中はもう逃げた。あとは自分も立ち去るだけ。

——ガチャ。

その願いは叶わなかった。渉より先に、外からドアを開けられてしまったのだ。

「……え？ わ……渉……先輩？」

「小雛……ちゃん……」

ドアノブを握った格好で、体操服を着た少女が硬直する。今、一番会いたくなかった少女が、女子更衣室の中にいる渉を見て、ヒクヒクと頬を引き攣らせる。

（……………終わった）

よりにもよって、小雛にドアを開けられてしまった。諦めと絶望で、全身の力が抜け落ちる。しかし、部屋に滑り込んだ小雛は後ろ手で素早くドアを閉め、自分の着替えを置いてあるロッカーに駆け寄った。

「先輩、服脱いでこれに着替えて！」

「……え？ で、でもこれって……」

「早く！」

質問を許さない迫力で彼女が投げてよこしたのは、女子の制服。これを着ろというのだろうか。だが迷っている余裕も戸惑っている暇もない。言われるままに自分の制服を脱ぐと、彼女はそれをバッグに詰め込み、渉の手を引いて更衣室を飛び出した。

「ちよ、ちよつと待つて。まだボタンが……」

「喋らないで！」

怒っている。絶対に怒っている。しかもそこへ、彼女のクラスメイトも戻ってきた。

「あれ。小雛ちゃんどこ行くの？」

「この娘、気分が悪いんだつて。保健室に連れていくから、先に教室に戻つてて」

淀みなく出まかせを言う小雛に、涉は動揺しながらも感心した。とにかく、今は彼女の話に乗るしかない。病人を装いつつ、他の女生徒に顔を見られないようにして、小雛に引かれながら小走りでその場を離れた。

よく、あの窮地を脱出できたものだと思う。それも、小雛の機転があつてこそ。

とはいえ、安心するのはまだ早かった。体育館脇の体育用具室に連れ込まれた涉は、今度は小雛の取り調べを受ける羽目になったからだ。

「……………先輩、あそこで何をしてたんですか？」

半袖の体操着に、最近には珍しい存在となつた濃緑色のブルマ。少女は腰に手を当て、マットに正座した女子制服姿の少年を怒りの表情で見下ろした。

「そ、その前に聞きたいんだけど……この紐は何かな？」

涉は、強張った笑みで小雛を見上げた。腕が動かない。体育用具室に入った途端、ここに落ちていたハチマキで後ろ手に縛られてしまったのだ。既視感を覚えるこの感覚に、こ

めかみを冷や汗が流れ落ちる。

「渉先輩が逃げないようにです。それより、質問に答えてください」

縛られなくても、どうせ彼女の制服のままでは逃げようがない。しかし、危機から脱出できた安堵感もあったのだろう。彼女の詰問も、渉はさほど脅威を感じていなかった。

（小雛ちゃんなら、ちゃんと説明すれば分かってくれるだろうし）

それにしても、女子の服というのは、こうも落ち着かないものなのだろうか。特に小雛のスカートは下着がはみ出しそうに短くて、股間がやけにスースーする。

（女の子って、何でこんな下着丸出しの格好で平気なんだ？）

想像以上の心許なさ。早く男の格好に戻りたい一心で懸命に言い訳する。

「えっと。あそこにいたのは、君のファンに騙されて……」

「ウソですね」

だが渉の話は、彼女の硬い声で一蹴された。

「あたしにファンなんているわけないでしょ。仮にいたとして、どうして渉先輩を陥れる必要があるんですか？」

「だから、それは、ファンだからこそというか……」

「どうしてそんな嘘を言うんですか。本当のことを言ってください」

言い訳を途中で遮る、その無情さに驚かされた。無邪気な少女だと思っていた彼女の意外な一面に、渉は一瞬、絶句してしまう。

「まだ言い逃れをするつもり？ それなら、こつちにも考えがあります」

「え？ あっ——!? うわわっ!?」

小雛が、渉の肩をトンと押した。正座していた上に縛られていては受け身が取れず、呆気なくマットの上に仰向けで転がされる。

「んふ……。先輩、男の子の割に身体が小さいから、あたしの制服、似合いますね」

放り出された脚の間に、見下したような眼の小雛が膝をついた。スカートを摘んで中を覗こうとする彼女に驚き、渉は反射的に裾を押さえて抵抗した。

「わあ！ こ、小雛ちゃ……ちよつ、やめ……!」

「あつれー。渉先輩、男の子なのにパンツを見られるの恥ずかしいんですかあ？」

自分の制服なのに、乱暴な手つきでスカートをめくりを強行する小雛。トランクスを見られることより、めくられること自体に、渉は激しい焦燥を感じた。

これが女の子の羞恥なのだろうか。だとしても、どうして男の自分がそんなものを。不可解な感情が全身に渦巻き、力が入らない。ついには小雛の細い腕に力負けて、スカートの中を覗き込まれた。

「あは、やつぱり。渉先輩、ボッキしてる」

「こ、小雛ちゃんっ。女の子がそんな言葉……。つて……ええっ!? 何で!!」

はしたない言葉遣いの、嬉しそうな後輩少女の声で、渉は初めて自分の股間の状態に気付いた。見なくても慣れ親しんだ感覚が伝えてくる。肉茎が、ずくずくと疼きながら、今

まさに完全な硬直状態に変化しようとしていた。

「うわあ、すごい……。トランクスの中で何かが動いてる。生き物みたい……」

「だ、だからダメだって、小雛ちゃん！」

瞳を輝かせ、小雛が股間を凝視する。渉はジタバタと腰を捻って暴れるが、彼女の視線を感じて腰が跳ねる。その隙を逃さず、彼女はするりとトランクスを剥いでしまった。

「うわああ！」

剥き出しになった勃起が跳ねる。と同時に、小雛はすかさずそれを捕らえた。躊躇など微塵も見せずしつかりと握り締め、しかも感触を確かめるように軽く扱き出す。

「ホントだ……。硬くて、熱くて、ドクドクしてる……」

さっきまでの冷徹な態度はどこに消えたのだろうか。硬直した男性器に眺め入ったり捏ね回したり。そうかと思うとカリ首の段差を爪の先でコリコリ引っ掻き、生じた甘美な微電流で渉の腰をバウンドさせた。

「はぐっ……ふッ、あ……つく！」

「うわっ、すごい。渉先輩って、ここが感じるんだあ。あはっ、こっちはどうですか？」

「そ、そこは……ダメ……だッ、あああっぐッ!!」

小雛は嬉しそうに眼を細め、次々と肉棒の快感ポイントを探った。裏筋を逆撫でたかと思うと睾丸をマッサージ。眼を白黒させて悶絶しながら、渉は奇妙な感覚に襲われた。

彼女の反応は、明らかに男性器を初めて見たもの。なのに愛撫は、いかにも手慣れている。

る。この感覚は、前にもどこかで味わった。

「こひな……ちゃん！ 強すぎる！ もっと優しく……ウぐあ！」

「んふっ。先輩、びんかーん。どうして女子更衣室にいたのか……ふふふっ、生徒会長と同じやり方で聞き出してあげる」

会長と言われて思い至った。男性器に対する反応の違和感は、静花に感じたのと同じもの。この学園の女生徒は、何か特別な性教育でも受けているのだろうか。

「実はあたし、見てたんです。渉先輩が椅子に縛られて、会長さんに苛められちゃうところ。もちろん、九条先輩のパンツにドクドクって射精するところも、すっかり」

悪戯っぽく舌を出す少女の凶悪なまでの愛らしさに、身体の奥が異様に熱くなる。

（こ、小雛ちゃんが……あれを!!）

あんな情けない姿を見られていたなんて。恥ずかしさで頭の血管が破裂しそうだ。それにしても、最初は怒っていた小雛のテンションが妙に高い。

（もしかして、九条先輩と同じことをするチャンスを狙ってただけなんじゃあ……）
だとすると、渉の白状なんて最初から期待していなかったことになる。

「ほらあ。ちゃんとか喋らないと、いつまで経っても射精できませんよお？」

疑問の解消は、またも快感責めの前に挫折した。カリ首をキュッと摘まれ、感電しそうな痺れに全身を硬直させられる。優しくない気持ちよさが思考をさせてくれない。

「だっ……だからそれは！ 君のファンに嵌められて……ひぐッ、きゅふウウッ！」

無駄だと知りつつ同じことを訴える。もちろん彼女は聞こうとはせず、硬直しながらも柔らかさを残す亀頭部分を、薄い爪で引つ搔いた。かと思つたら、今度はジンジンと痛むそこを、舌で軽くなぞり上げた。

「はぐあつ、ああああああああつ！」

苦痛と快感がいつべんに襲つて、頭が真っ白になる。達してしまひそうになったが、引き攣つた内腿の筋肉が射精を堰き止め、皮肉にも快感を長引かせた。

「出しちゃうかと思つたけど……さすが、会長の責めに耐えただけのことはありますね」
褒めているのか馬鹿にしているのか分からない口調で、小雛はさらにペニスに顔を近づけた。扱きながら、チュッチュと啄むようなキスを亀頭に降らせる。気持ちいい。だが、どうせなら、もっとプレイを進めて欲しい。

「……………ひなちゃ……………」

すると、まるで渉の心を読み取つたように彼女の唇が不敵に微笑んだ。

「……舐めて欲しい？ んふふふつ。言わなくても分かるよ。だって、そういう顔してるもん。なら……罪を認めて。更衣室で何をしたかったか、言つて……先輩」

悪戯っぽく眼を細めながら、亀頭の上で舌をひらひらとそよがせる。その表情で渉は悟つた。彼女は、ただ自分の欲しい答えを聞きたいだけ。事実なんてどうでもいいのだ。

「ぼ、僕は……僕は……！」

自分でも情けなくなるほどの浅ましい欲求が胸を締め付ける。静花にもこんな風に焦ら

されて、結局舐めてもらっていない。舐められてみたい。女の子の口に、自分のものを咥えて欲しくて堪らない。罪を認めさえすれば――。

ピンクの舌が、鈴口から漏れる先走り液をペロツと舐め取る。そのかすかな接触で生まれた快感電流が、渉の理性をブツンと切った。

「僕は……僕はっ！ こ、小雛ちゃんのパンツが欲しくて、更衣室に入りました！」

考えてもいなかった罪を、力の限り叫んで認める。これで、ペニスを彼女の口で可愛がってもらえる。だが、期待した温かさは訪れなかった。

「だーめ。そんなのじゃダメです。せっかくそういう格好してるんだから、もっと女の子っぽく言って」

「そ……そんな……！」

彼女の求める通りにしたのに、まだ足りないというのだろうか。だが股間で渦巻く欲求不満に支配されてしまっている今、渉に逆らうという選択肢はなかった。

「僕……じゃなくて……。あ……わたし……わたし、は……っ！ 小雛ちゃんのパンツが欲しかった、のお！」

「それだけ？ この制服はどうしたの？」

「そ……それから、小雛ちゃんの制服を着て……そ、それから……それから、クンクン匂いを嗅ぎたかったんですう！」

嘘の告白をしながら、渉はおかしな感覚に襲われた。女の子言葉で喋るたび、胸がとき

めく。自分でも驚くほど高い声で、後輩少女に媚びまくる。

「女の子同士なのに？ あたしでいやらしいこと考えて、クリトリスこんなに大きくしちやっただ。とんだ変態さんね。んふふ、いやらしい娘……このヘンタイっ」

「ふああ……ご、ごめんなさ……いつ！」

握ったペニスをグリグリ捻りながら、小雛が口汚く罵った。だが渉の身体は、悔しくなるどころか妖しい悦びで打ち震える。まるで本当の女の子のように乳首の感覚も鋭敏になり、擦れるシャツにも快感を覚えてしまう。

「こおんないやらしい娘には、お仕置きが必要ね……」

それは突然訪れた。生温かい空間が、ペニスを包み込んだのだ。ぬるつとした肉片が肉柱に絡みつき、螺旋を描きながら龟头まで一気に舐め上げた。

「ふおあ!! ……………あくつ、お、ふおおあああつ！」

まるで、敏感な肉棒の形を確かめるように軟体動物が這い回る。窄ませた頬に思いきり吸引され、尻肉がキュッと引き締まる。

「ん……ふあ、熱い。それに……大きい……。顎、外れそ……。ねえ、おちんちんて、みんなこんなに大きいのか？ んむつ、ちゅ……。あふうん……。ちゅるっ！」

「わ、分からないっ。だ……ふうあッ、誰かと比べたことなんてないし……。ンぐう！」

眉を寄せ、勃起したペニスの大きさに苦悶しながら、それでも奥まで咥え込む彼女が、渉は嬉しかった。悦びが大きな快感になって、堪らず腰を突き上げる。

「ンぐっ……ふあんっ」

喉を突かれて苦しかったのか、小雛はペニスを吐き出してしまった。しかしすぐに掴んで引き寄せ、張り詰めた裏筋を舌で撫で上げた。

「そ、そこ……もつと、そこおおおおおお！」

「んふ、はああ……。ここも気持ちいいんだ……可愛い」

新たな快感ポイントを発見した小雛は、肉柱の裏に、ねっとり濡れた舌を押し付けた。何度も逆撫でして唾液を塗り付け、陰囊と肉柱の接続部分に吸い付いたかと思うと、一気になぞり上げる。

「ふあっ！ ほふあつ、あああッ！」

亀頭の裏をくすぐられるたび射精しそうな快感が走って、渉は後ろ手に縛られた指をマッットに食い込ませた。女の子の舌と唇が、こんなに気持ちいいものだったなんて。罪を認めてよかったと、おかしい満足感で胸が詰まる。

「もつと……もつと舐めて……小雛ちゃんの、口で……！」

小雛もそれに応え、渉の膝をがばつと広げると、再び喉の奥まで勃起を捻じ込んだ。髪を揺らして頭を上下させ、唾液を飛ばしながらのピストン運動で勃起を抜く。

——じゅぶ、じゅるっ、ちゅばっ、ぶじゅる！

「ほう、あん、うひゅ、うはあう！」

彼女の動きに合わせて声が漏れる。腰がうねって、犯すように少女の口を突きまくる。

「こ、小雛ちゃんの中……熱い！ 溶けそう……だ！」

熱くて心地いい空間の中で、亀頭はもう破裂寸前。前触れ粘液が、とろとろと少女の口腔に流れ込む。その味を感じたのだろうか。小雛は鈴口に吸い付いて、次々と注ぎ込まれるそれを夢中でちゅぱちゅぱ吸いまくった。

「ん、つむ……変な味……ちゅっ、ちゅるる……じゅるるうっ！」

「ふおおあつ！ そ、そんなにされたら……ああう！」

まだ内側にある先走り液まで吸い取る勢いに、縛られて身動きできない渉は快感に抵抗できず、悶える以外に何もできない。そうでなくても、女の子が自分のペニスにキスをしているビジュアルだけで頭がおかしくなりそうだ。

「あ……ああもう！ もう出……りゅっ！」

ペニスが張り詰める。限界に近い。だがそれは小雛も同じだった。

「んああああ。先輩ばかりずるいつ。あたしもお！」

小雛が、髪を振り乱しながら身体を起こす。急にペニスを放り出し、渉の腰に跨またがってきた。天井を指して立つ勃起を、ブルマの股間で押し潰す。

「お、うああっぐ！」

ペニスに小雛の体重がのし掛かる。同時に、彼女も大きく仰け反った。渉を責めてばかりだったのが、自分も快感を欲しくなったらしい。起伏のない胸を突き上げ、ブルマで裏筋をグイグイ擦る。

「あうん、硬い……。ブ、ブルマ越しなのに、あたしのに食い込んで……。きゅふうんっ」
「くうあ！ き、気持ちいい……。いい、小雛ちゃ……。んぐっ、くううはああああっ！」

縛られた手が背中側にあるので、自然と腰が突き上がる格好になる。それが彼女の股間を押し上げ、密着度の高まった摩擦快感でふたりを苛んだ。

「あふん、見て先輩いい……。あたし、おちんちん生えちゃったあ」

喘ぎながら首を上げれば、ブルマからペニスの先端が顔を覗かせている。それが彼女のものであるような錯覚を起こし、渉も異様に昂^{たかぶ}った。

「す、すごい小雛ちゃん！ 小雛ちゃんのちんちんが……。僕の、をおお！」

「きゅふあん！ あたしのおちんちんで、先輩のこと犯してるう。あは、きやはははっ」
笑いながらぐねぐねと腰をくねらせ、小雛は渉のペニスで渉を犯す。ブルマのザラザラと圧迫感で裏筋を擦られ、あつという間に限界点を突破する。

「小雛ちゃん、小雛ちゃん！ も、もうダメ……。出ちゃう、出ちゃうよおお！」
「ああ……。先輩、可愛い……。！ その顔見てるだけで、あたしもイキそ……」

小雛の腰使いが激しくなった。唇を舐めながら、前後に腰をうねらせ勃起を齧る。まるで、精液を絞り取ろうとするように。

「こ、小雛ちゃん！ 出ちゃうよ、本当に出ちゃう、出……。あがああああっ!!」

「せ、先輩つも、そんなにおま○こ突かないで！ いきゅ、きゅふうあああッ！」
小雛が身体を激しく揺さぶる。擦られたペニスの中で、耐えがたい疼きが出口を求めて

暴れまくる。ブルマがカリ首を掠めた。頭が真っ白になる快感が走って勃起が爆ぜる。

「小雛ちゃん、小雛……ちゃ……あ、があああああッ!!」

——びゆるう！　びゆるッ、びゆるびゆる、じゅびゆるっ、どびゆるううう！

「ああ出てる！　いっぱい出てる！　あたしも……あたしもイッチャ……ひゅううふあああああッ!!」

真っ直ぐ飛んだ精液が、彼女の制服のあちこちに乳白色の水溜まりを作った。同時に達した小雛も身体を仰け反らせ、絶頂痙攣で射精直後のペニスに追い打ちをかける。

「あう、う……あ……」

最後まで残っていた白濁液が、どろっと垂れてスカートを濡らした。精液の青臭さが周囲に満ちる中、荒い息の小雛が身体を重ねてくる。

「はあ……はあ……はあ……」

直接性器を刺激したわけでもないのに、眼を開けられないほど喘いでいる。そんな彼女の小鼻が小さくひくついた。白濁液の臭いに反応し、気だるそうに渉の頬に頬を重ねる。

「ふあ……あーあ、ひっどおい。あたしの制服、精液でベトベトお。くっさあい。もし、先輩のばかあ……」

「ご、ごめ……ン」

謝罪は、キスに遮られた。彼女は舌を絡めながら身体をくねらせ、臭いと文句を言った渉の精液を、自分の制服と、そして着ている体操服に、念入りに擦り込んだ。



「ふふっ。その通り。あたしたち、これでお互いの初めてを貰いつこしたの」

そういえば、小雛に挿入した時、痛がりも出血もしなかった。いくら初体験で昂っていたとはいえ、気付きもしなかった自分に呆れる。

それにしても、女の子の初めてを、処女を、姉妹同士で。美少女姉妹の相姦なんて、童貞同然の少年には刺激が強すぎる。興奮しすぎて目眩を起こしそうだ。

「で、でも……それなら、どうして僕を……」

姉妹相姦の秘密は、外に漏れて大丈夫なものではない。赤の他人をそこに加えることは、相当なりスクがあつたはず。

「小雛が言い出したのよ。オモチャじゃ物足りなくなつたのでしょね。本物のおちんちんを挿れてみたい、可愛い男の子のペットが欲しいって。最初は反対したのよ？ 男の子には私も興味あつたけど……条件が」

無理もない。彼女たちのペットになるには、性的な満足を与えられるだけでなく、何があつても秘密を守る従順さと、口の堅さを兼ね備えている必要がある。こんな美少女たちとエッチできたら、どうしたって自慢したくなるのが思春期のオスというものだ。

「え？ それで……僕？」

「見つけた時は嬉しかったわ。自分が遅刻しそうなものにお婆さんの道案内をするお人好しだし、顔も凄く好みで可愛いし。だから……試したの。下着の盗難をでっちあげて」

「じゃ、じゃあ……あの濡れ衣って……」

最初から謀られたものだったのだ。愕然とする渉を、静花がクスクス笑う。

「どんなに責めても、小雛のことを庇って喋らなかつたでしょ。だから、信用できる人だと判断して、あなたをペットに決定したのよ」

（わ……訳が分からない……）

渉は、複雑な心境になつて頭を抱えた。嵌められたことには怒りを覚えるし、小雛のことを喋らなかつたのは、確信を持てなかつたからだ。とはいえ、そのおかげでこうして気持ちのいい体験をできたのだから、文句を言う気持ちにもならない。

ともかく、疑問のひとつは解消できた。ふたりとも愛撫には積極的だったのに、男のものには新鮮な反応を示していたわけだ。

ただ、それでも納得いかない部分がある。渉が下着ドロとして疑われたのは、偶然、女子更衣室の前にいたからだ。それに、小雛が渉の制服に下着を仕込めたのも、たまたま校舎裏に逃げ込んだからにすぎない。あれも計画的だったと考えるには無理がある。

「ああ、それはね……」

渉が疑問を口にする、小雛は笑いを堪えるように肩を震わせた。

「まず騒ぎを起こしてえ、それから先輩の鞆に下着を入れておいて、風紀委員に持ち物検査をさせる予定だったの。なのに、あたしが教室に忍び込む前に先輩が追い回されてるんだもん。びっくりしちゃつた」

計画の変更を余儀なくされた小雛は、渉が一時的に逃げきつたのを幸いに、直接ポケッ

トに捻じ込む作戦に出たらしい。

「でも先輩と直接顔を合わせられたから、結果的にはそっちの方がよかったみたい。あ、それから取り調べを覗いてたっていうのはウソ。だって、お姉ちゃんがどんな風に先輩を誘惑するか、それ考えたの、あたしだし。……ごめんね」

ペロツと舌を出す小雛に、まったく悪びれた様子はない。何のことはない。間拔けな獲物が、自ら罠に飛び込んだだけ。自分の間の悪さに心底呆れる。

「でも涉くんと出会えてよかった。ね、小雛」

「本当だね、お姉ちゃん。こんな最高のペット、探して見つかるものじゃないもん」

ふたりの眼が再び欲情色に濡れ、左右からペニスに手を伸ばしてきた。

「え……ちよと待って、今日はもう無理……うわああああ!!」

とんでもない姉妹に捕まった。ふたりがかりの強制フェラチオに身悶えしながら、涉は底なしの性欲の奴隷にされたことを思い知り、戦慄した。

それでも。

ペット呼ばわりの屈辱を受け、生徒会役員たちからは痛々しい視線を向けられても、走り甘んじた。

「さて、今日はこれくらいにしておきましょう」

みんなが帰った後、いつものように会長席の静花が渉を手招きする。これから、従順なペットへの「ご褒美タイム」が始まるのだ。こんな甘美な時間をくれるのに、逃げ出せる

わけがない。渉は胸躍らせ、彼女に命じられるまま、会長席の傍に跪いた。

「……どうすればいいか、分かるわね？」

くるつと椅子を回して、膝を開く淫乱生徒会長。どこにスイッチがあるのだろう。普段はおっとりとした笑みが、妖艶なものに一変するのが不思議でならない。渉は、しっとり滑らかな太腿に恭しく手うやうやを置くと、甘い匂いのするスカートの下に顔を潜り込ませた。

「はあ……」

一日動いたせいで、彼女のそこは少しだけ蒸れて、温かい。真っ白な下着の中心からほのかに欲情の匂いがある。鼻孔と頭を刺激された渉は、我を忘れてむしゃぶりついた。

「ああっ！ そうよ……いっぱい舐めて……あん、ん……くうん！」

下着越しに感じる女性器の窪みを、尖らせた舌先でなぞり上げる。静花は楽しそうに身を振らせ、甲高い嬌声を上げた。

あの告白が本当なら、彼女も処女ではないはず。だが渉のペニスは、まだ、この感触を知らない。「小雛が欲しがったペットだから、優先権は彼女にある」というのがその理由らしいが、渉も静花も、互いに欲しがっているのは何となく感じていた。

「くふ……きゅ、ふ……あん！ 舌、気持ちいい……きゅふううん！」

もっと可愛い声を聞きたくなった渉は、唾液と恥蜜で皸になった下着を指でずらし、直に舌を這わせた。貝肉のような恥鬚を掻き分け、粘液が溢れる膣口を執拗になぞる。

「あうん！ あ、くふ……ッ。凄い、涉くん……す、凄く……上手……あッはあッ!!」

頬を挟む内腿がガクガクと震え始めた。肌もしつとりと汗を掻き、静花自身の持つ濃厚な匂いが、スカートの内側という密室に立ち籠める。それを吸うと、媚薬でも飲まされたように頭がぼやけて、秘唇にキス奉仕することしか考えられなくなる。

「静花……さん。んむ……ちゅ、じゅる、ちゅばっ、じゅるるっ！」

「はぁうん、きゅ、ふっ……ん、くううう!!」

静花が髪を振り乱して悦び悶える。腰掛けながらふくらはぎを突っ張らせ、爪先立ちで快感に耐える。甘い喘ぎを聞かされて、肉茎が激しく勃起して痛い。自分で押さえて我慢するが、それもそろそろ限界だ。

——ずずず、じゅるるっ！

「きゅふぁぁあ！ はっ、ぁう、ふッ……んぐ、きゅううううッ!!」

欲求不満を愛撫にぶつけ、クリトリスを思いきり吸引すると、急に静花の身体が一直線に突っ張った。ズルズルと椅子を滑り落ち、渉の肩にのし掛かる。突然のことに呆氣に取られていると、彼女は喘ぐように唇をぶつけてきた。

「ッむ！ ぷはっ、し……ずか、さん!? ……むぐ、あふ……んむ、ぐううう！」

「ぁうん、イッちゃった……ちゅ、じゅば、じゅるるっ」

唇の端から唾液が零れ落ちるほど激しく舌を絡め、徐々に体重を預けてくる。渉を床に押し倒した静花は、キスをしながら器用にベルトを外し、トランクスをずり下げ、硬く張った勃起を掴み出した。

「……うっ！」

「あはあ、硬あい♪」

ほんの数回、軽く扱いただけなのに、甘美な疼きが脳天を突き抜ける。彼女は唾液でベタベタになった唇を舌で拭うと、渉の下半身を丸裸に剥き、自分も下着を脱ぎ捨てた。

「今日は、まだ小雛も来てないから……」

やっと挿入する気になったらしい。軽く握った勃起を揉みながら、渉に跨がる。ゆつくりと腰を降ろしてくる。期待に胸を弾ませ、硬勃起が彼女の恥肉に包まれるのを待つ。

「はあ……本物って凄い。こんなに大きくて熱いなんて……」

ところが彼女は、すぐには挿入しなかった。先端が小陰唇に触れたところで腰を止め、恥裂に擦り付ける。自分のバージンを奪ったオモチャと比べているのだろうか。うつとりとした顔で、生の肉棒の感触を楽しんでいる。

「しっ……静花さんっ。そんな、早く……っ!!」

直前で焦らされた方は堪ったものではない。催促するように腰を突き上げるが、彼女は腰を浮かせ逃げてしまう。敏感な先端を、膣前庭にぬるぬる舐められるのは気持ちいいだが挿入に逸る肉欲棒に、この生殺しは辛すぎる。

「し、ずか……さあぁん！」

「んふ……我慢できないの？ 困ったペットね」

床に爪を立てて泣きごとを叫ぶと、濡れ陰唇が挟むようにキスしてくれた。だがそれは

逆に、牡の挿入欲求を煽り立てた。挿れたくて挿れたくて、頭がおかしくなりそうだ。それに静花の声も、セリフの割に余裕がない。

「静花さん！ い、挿れた、……いッ、早く、早く中に……はう、ああッ!!」

円を描くように腰をひくつかせる。その拍子に、先端部が膣口にすっぽり嵌まった。恥蜜と、勃起が漏らす先走り液が混じり合い、熱い快感となって鈴口に流れ込む。

「あ、が……、んんッぐ！ があああ!」

「はあ……はあ……。おちんちん、ビクビクしてる……！ わ、私も……限界……!!」

焦らしに耐えきれず腰が跳ねる。同時に彼女のお尻も降りてきて、鋼のように張り詰めた勃起が、彼女の内部へと埋め込まれていく。

「ふ、あ……あッ、こんな……あッ、熱い……大きい……！ さ、裂けちゃう……ッ!!」

静花が喉を見せて仰け反った。根元まで飲み込んだとはいえ、やけに苦しそうに渉の腹に手をつき悶える。その表情で、挿入快感に酔いかけていた渉は、はたと気付いた。

オモチャでは慣れている静花も、「本物」を挿れるのは初めてということに。

生ペニスの熱さとサイズを扱いかね、困惑している。となれば、挿入に関しては渉の方が先輩。ここは自分がリードすべき場面に違いない。

「う……うう……!! あ、が、ふっぐううっ!!」

が、そんな余裕はなかった。一度や二度の経験で、女性を導けるほどのテクニクが身に付くはずもない。それに肉棒を咥える彼女の膣が、渉を激しく悶絶させた。

（気持ちいい……。気持ちいいけど……。き、きつい!!）

小雛と同じか、もしかしたらそれ以上に狭い肉筒がペニスを締め付け、絞り上げ、快感が苦痛から分らない呻きを上げさせられる。なんとか彼女を満足させようとするが、静花の身悶えと共に蠢く膣肉に翻弄されるばかり。射精を堪えるだけで精いっぱいだ。静花でさえこんな状態なのに、平然と勃起を受け入れた小雛の身体はどうなっているのだろう。

「し、静花さん動かないで！ で……。出ちゃうから！」

「あんっ。涉くんこそ……。そんなに大きいので、中で暴れられたら……。きゅっふあんっ！」
彼女のお尻が強張って、ペニスをギュウギュウ締め上げる。股間の窮状をキスでごまかすふたりの上に、別の人物が影を落とした。

「ああつ、もう始めてるう！ もー、あたしを待っててくれてもいいのに！」

生徒会の仕事が終わるまで、どこかで時間を潰していたのだろう。遅れて来た小雛は結合部の脇にしゃがみ、言葉とは裏腹の楽しそうな声で、繋がる姉と渉を見下ろした。

「でも、やっぱりお姉ちゃん苦しそう。無理しないで、手伝ってって言えばいいのに」

「だって……。小雛がひとりでできたのに、お姉ちゃんが、こんな……。ン……。ンンッ！」

自分の狭さを気にしていた静花は、姉として小雛に挿入を手伝ってもらうことをためらっていたのだ。仲のいい姉妹の意外な関係に、勃起の痛さも忘れて微笑ましくなる。

「もう、お姉ちゃんの意地っ張り。あたしに任せて」

小雛は、まるでペンギンのようにペタペタと、しゃがんだままの姿勢でふたりの足元へ

「ふああああ！ あ、ひやふ、んきゅはあああああ！！」

「かふあッ、はうあん、あう！ お尻……お尻があああ！」

「お、お尻っ!？」

「んふ。どう？ スムーズになったでしょ。おねえちゃん、お尻を舐めるの好きだけど」

自分が舐められるのも大好きなの。だからほら、こうすると……」

「ひやああああん、ヒツ、イツ、そこつ、らめえええええええええええええええええ！」

「あうあつ、あがつ、はがああああつ!!」

164

ラと口腔に流れ込んだ静花の唾液が、媚薬となつて勃起を滾らせる。

「ひっ、いぎっ、きゅふッ！ こ、こしゅれる。わああたるくんの、おちんちんが、おおお、おま〇こ、こしゅつて……はう!! うっきゅふああああ!!」

欲情で緩みきつた顔の静花が、渉の首筋を舐め上げた。唾液をねっとり塗り付けて、頸動脈を何度も逆撫でする。全身の毛穴が開くような快感を送り込まれ、渉も必死の思いで膣壁に勃起を擦り付けた。

「し、静花さんっ。いいっ、気持ちいい。ああ、あ、あつ、あッ!!」

肉壁にカリ首が引つ掛かり、先走り液が彼女の膣内に漏れるのが分かる。淫裂からも蜜が流れ、渉の股間がベトベトだ。ふたりとも限界が近い。互いの背中に腕を回してしがみつき、絶頂に向けて走り出す。

「だ、出している？ 静花さんの中に、中に……あ、ああもう、もう!」

「ああ! おちんちんっ、おちんちん、硬く……! あ、ひ、あはあん! 私、ペットに中出しされちゃう。悪いペットに、中でいっぱい出されちゃうううふうあああ!!」

嫌がるセリフを吐きながら、静花はますます抽送のスピードを上げた。胎内で精液を絞り取ろうと、腰の動きに捻りを加える。渉も震える膝を立て、射精に備える。

「ででで出る、出る出る! そんな、されたら……あ、あ、もうもう、ああ、もう!」

そこへ、小雛がとどめを刺しにきた。姉の尻穴を舐め廻りながら、渉のアヌスを指で挟む。鋭い快感に貫かれ、頭の中が真っ白になる。

「あぐあああああ！ 出る、出るうあああああああ!!」

「ヒッ、ヒッ、ひいひいあッ！ お、お腹、お腹に、お腹熱いお腹ふあああッ!!」

——どぶるう、どく、どぶどぶ、どびゆるううううう！

たつぷりと膣内射精され、静花が背中を弓なりに仰け反らせた。ヒクヒクと全身を痙攣させ、膣肉も、まるで子宮の奥まで精液を飲み込もうとするように蠢いた。

「あ……あ……。ペットくん……中、出し……されちゃったあ……」

ドッと倒れ込んだ静花が、満足した渉の顔を、蕩けた表情で嬉しそうに舐め回す。抱き合ってキスをしていたら、横から小雛の舌が割り込んできた。

「んふ。ふたりとも気持ちよさそう……。でもね、先輩……」

「え……うわっ？」

射精快感で呆けた顔に、生温かいピンクの布切れが落ちてきた。慌ててそれを払いのけると、視界に幼い恥毛が飛び込んでくる。

「お姉ちゃんだけ満足させて、あたしは除け者……ってことはないよね？」

スカートを摘み上げ、裸の腰を見せる小雛。妖しく眼を細め、自分の恥裂を指でまさぐる。淫靡な光景に肉棒が疼く。とはいえ、もう少し待ってくれないと色々と回復しない。

「ちょ……！ ちよつとでいいから休ませて！」

「だーめ。ペットがご主人様に逆らってはいけません」

静花が、逃げ腰の渉を押さえつけた。そして膣からペニスを抜くと、萎^{しお}れかけたそれを



口に含んで強制的に勃起させる。

「じゃ、先輩。今度はあたしの膣なかに中出しね♪」

「ま、待つて！ 本当に、ちよつとだけ休ませ……………あ、ぐううッ！」

硬くなった肉茎に、姉と入れ替わった小雛が跨がつてきた。ピリピリ痺れる亀頭が彼女の膣に包まれる。いつもこうだ。渉のコンディションなどお構いなしに、彼女たちはペニスを求めてくる。

それでも、どんな苦痛や恥辱を与えられても、逃げる気にはならない。美少女姉妹が与えてくれる大きな快感に、渉は完全に捌め捕られていた。

「それでは、全校集会を始めます。最初に、生徒会長挨拶から」

月に一度、全生徒を体育館に集めての全校集会。内容は、生徒会長の挨拶の後は、メイ・インイベントの学園長の長話。それと行事予定や健康に関する連絡事項。前の学校と大差ない退屈な儀式だ。それを昼食後の午後いちの時間にやるものだから、膝を抱えて座る生徒の何割かが、眠気に負けて頭を揺らす。

そんな中、列の一番後ろに並んだ渉の眼は、珍しく冴えていた。

「……生徒会長の九条静花です。まず、頻発している下着泥棒についてですが……」

演壇に立つ静花の姿に見惚れていたからだ。穏やかで、それでいてよく通る声に誰もが聞き惚れている。普段はあんなにおっとりしているのに、壇上の彼女は凛々しく、やはり

生徒の代表なのだと納得させられた。

(……それで、あんなにエッチなんだもんなあ……)

この体育館に集まった教師や生徒の中で、彼女の本当の姿を知っているのは、彼女の妹である小雛の他は、自分だけ。快感に蕩けた顔、火照った肌の熱さ、可愛くも激しい喘ぎ声。その全てを独占しているのかと思うと、妙な優越感が湧いてくる。

(誰にも喋れないのが辛いけど……三人だけの秘密っていうのも悪くないよな)

ふたりがかりで気持ちよくしてくれる関係なんて、望んでもそう体験できることではない。あの快感を得られるなら、多少のわがままや屈辱も、何てことはない。

そう思った矢先だった。

携帯のバイブが振動し、メールの着信を伝えた。校則では放課後まで切っておくことになっっているが、いつでも連絡できるようにしておくと、小雛に命令されているのだ。

『先輩、今すぐ校舎裏に来て。いいこと、しょ♪』

メールは、その小雛からだった。しかも、来られる？ ではなく、来て。相変わらずの強引なお誘いに苦笑する。

(い、いいことって……アレ、だよなあ……)

ゴクンと喉が鳴った。しかし、今は全校集会の真っ最中なのに、彼女は絶賛サボリ中なのだろうか。どうしようかと迷い、周囲を窺う。幸か不幸か、自分は最後尾。しかも、教師たちは無警戒に誰もが壇上を見ていて、こちらに注意を向けている気配はない。振り返

れば扉が開けっぱなし。

揃いすぎた条件に、警報が頭の片隅で鳴る。しかし渉はそれを無視して、気付けば、いそいそと体育館を脱出していた。

「やっぱり、まずいよなあ……」

最近では風紀委員に注意されることも少なくなつて、警戒心が薄くなつてゐるのかもしれない。それに、万が一誰かに見つかったとしても、小雛や静花が取り成してくれるだろうという期待もあった。

「先輩、こつちこつち」

小走りで校舎裏に向かうと、顔だけ覗かせた小雛が楽しそうに手招きした。どうせ周囲には誰もいないのに、潜めた声が、いけない密会の雰囲気盛り上げる。

「えへへー。せーんばい」

渉を背の低い繁みに引き込むや否や、彼女は膝立ちで唇を寄せてきた。やる気を隠しもしない少女には、さすがに苦笑せずにはいられない。

「小雛ちゃん、サボリはよくないと思うよ？」

「そう言う先輩だつて、あたしとエッチしたくて抜けてきたんでしょ？」

もちろん、そう反論されるのは想定済み。やすやすとお誘いに乗ってしまった渉に、彼女をとにかく言える資格があるはずもない。

「そうだけど……僕だつて一応は上級生だし、形だけでも注意しておこうと思っただけ」

それ以上は議論をするつもりもない。渉も小雛の腰を抱き寄せ、唇を重ねる。舌が絡み合うより早く、彼女の手が股間に伸びた。掴み出した肉棒を掌で揉み、勃起を促す。

「……ん、あ」

「せんばい、あたしも……」

舌を絡めながら、小雛が腰をくねらせる。じわじわと広がる快感に眉を寄せながら、渉も彼女のスカートに手を忍ばせた。下着の底を撫でようと、内腿に指を割り込ませる。

「待ちなさい!!」

だがパンツに触れる直前、鋭い声に止められた。反射的に手を引っ込める。さすがに小雛も驚いたのか、ビクツと肩を竦めながら眼を見開いた。

（やばい……みつかった?）

彼女と視線で言葉を交わし、繁みの陰から様子を窺う。枝葉を揺らさないように注意して顔を覗かせれば、見覚えのある後ろ姿が腰に手を当てて仁王立ちしていた。

「顔は見えないけど……あれって、風紀委員の北川さんだよな?」

小雛が小声で囁きかける。あのポニーテールは間違いない。亜季。厄介な人に見つかったと思っただけ、彼女は渉たちではなく、例の不良少女たちと対峙している。亜季よりもっと関わりたくない連中だ。渉が洩い顔を見ると、小雛がよしよしと頭を撫でてくれた。

それにしても、彼女たちの間に漂う雰囲気は尋常ではない。いつもの遅刻や服装がどうかというレベルではなく、殺伐とした緊張感が張り詰めている。

耳元に囁きかけると、彼女は快感に蕩けた顔で素直にコクつと頷いた。

「あ、はうん……。こ、こんな凄いの……。初めて……。はう……。きゅふうン……」

「へえ。じゃあ凄くないのなら知ってるんだ」

「う、うん……。毎日、自分でして……」

恥ずかしい告白の途中で我に返った亜季が、ハッとして枕に顔を埋める。だが渉は許さない。力の抜けた彼女の身体を仰向けにひっくり返す。

「亜季ちゃんでもオナニーするんだね。誰のことを考えてするの？」

「やあ……。やあん、バカバカ、バカあ……。！」

枕を抱え、くぐもった声で罵ってくる。渉は、そんな亜季の手を取り、硬く勃起した肉棒を握らせた。彼女の脚を大きく開き、身体を割り込ませる。肉槍の先端を恥裂にあてがうと、亜季の身体がビクンと跳ねた。

「そんなの……」

枕の向こうから、おどおどと眼を覗かせる半裸の風紀委員。しかしその手はしっかりと渉を握り締め、自らの身体に引き寄せる。

「そんなの……。涉くんに決まってるじゃない……」

頬を染めながらの告白に、渉の方が恥ずかしくなる。彼女の腰が、わずかに動いた。とろとろに蕩けた恥唇が亀頭にキスして、射精しそうな快感で背筋が震える。

亜季が、そっと目蓋を閉じた。甘い吐息でキスをねだる。渉が唇を重ねると同時に、亀

頭の先が恥裂にめり込む。ふたりは手を重ねて勃起を握り、その中に埋め込んだ。

「ん……ああ……あ、あ、あああああああああああッ!!」

だが半ばも進まないうちに、亜季が苦痛に顔を歪めた。九条姉妹の時には感じなかった抵抗に遭い、挿入が進まない。彼女は身体を強張らせるばかり。強引に押し進めようとした涉だったが、重大なことを思い出した。

静花や小雛と違い、彼女が処女であることに。経験の浅い涉には、うまく処女膜を突き破れる自信がない。そんな不安が伝わったのだろう。

「ふう……はあ……ふううう……。へ、平気だよ、涉くん……」

「で、でも……もし辛いなら……」

中止を申し出ようとした口を、細い人差し指が塞ぐ。そして彼女は下からにつこり微笑み、脂汗を浮かべた顔で、ひとつ、大きく、深呼吸した。

「ここまできて、やめたくない……モン」

甘えた声で涉の顔を引き寄せ、口に舌を挿し込んだ。震える脚も、腰に絡みつく。彼女に、挿入を中断するつもりはない。

「分かった。深呼吸して、力を抜いて……」

とにかく、こうも力まわっているのは、入れられる感じがしない。静花との時を思い出して、髪を撫でながら彼女の身体の緊張を解く。

「はあ……はあああ……」

亜季が深く息を吐いた。肩の力が緩む。長引かせる方が酷だと思った渉は、一気に腰を押し進めた。ブチンと何かが切れる感触がする。途端に、太勃起はずるずると奥まで飲み込まれていった。

「あッ！ はあッ……あッ……くッはあああああッ!!」

せつかく緩んだ亜季の身体、全部が強張る。きつく閉じた目蓋の下から、大粒の涙がロボロと零れ落ちる。綺麗なその雫を、渉は仔犬のように舐め取った。

「あうッ……う……ン！」

「じつとして亜季ちゃん！ 動かないで……」

もちろん彼女の傷みを思っていることだが、渉自身も、迫る危機に焦っていた。

処女の締め付けはあまりに強烈。特に膣口は、輪ゴムを何本も重ねたように、勃起の根元を窒息させる。そのくせ内側の壁は柔らかく、痛みに耐えかねた彼女が腰を振らせるたび舐めるように絡みついて、せめぎ合う苦痛と快感が肉棒を苛む。

動かしたい。この気持ちいい肉穴を思いきり突き回したい。しかし、これ以上、亜季に苦痛は与えられない。渉も歯を食い縛り、暴走寸前の肉欲を抑える。

「わ、渉……くん。あ、はああ、はああ……う、動かして、いいよ……」

苦しげな息の下、亜季が頬を撫でてきた。渉が欲求に耐えているのを感じたのだろう。

「で、でも……亜季ちゃんが……」

「わたしなら、平気……もう、たいぶ痛みも引いてきたし……」

それは、きつと嘘だ。しかし、一度許しが出てしまうと、堪え性のない若肉棒は、簡単に我慢のタガを外してしまった。

「い、いいの……？」

「うん。でも……優しくしてね……？」

怖いと思っていた吊り目がちな瞳が、自分に甘える。そのギャップに胸がときめき、渉の腰が勝手に動き始めた。心も身体も未熟な自分が情けない。しかし、気持ちいい媚肉に包まれた肉棒の暴走を止めることは、もはや不可能だった。

「ああ……亜季ちゃん……亜季ちゃん！」

徐々に腰の動きが速くなる。抽送のストロークも大きくなる。少しでも痛みを和らげようと思うのだが、熱く湿った肉壁が絡みつくのが、あまりにも気持ちいい。渉は処女への思いやりも忘れ、肉棒を膣壁に思いきり擦り付けた。

「ああ……き、気持ちいい……。亜季ちゃんの膣、熱くて……ぬるぬるで……。ああ……はあああ、きき、気持ちいい……。い、あああ!!」

「きゅ、ふううん……ッ。あん、あんっ。わ、涉くんの。大きい……大きくて硬いのが、わたしの中……なか、あッ、掻き回して……。あうん、あん、ふあああううあうん!!」

大きく張ったカリ首で、処女肉を掻き回す。信じられないことに、彼女も膝を立てて腰を浮かせ、肉棒を迎え撃った。初めてとは思えない卑猥な動きでお尻をくねらせ、螺旋状にペニスを咥え込む。捻じられた裏筋とカリ首から痺れるような快感が生まれ、耐えきれ

なくなつた渉はキスに救いを求めた。

「あ、すうごッ……凄……亜季ちゃん。いい、痛く……ないの？ あうっ！」

「い、痛いけど……分かんないっ。我慢できないっ！ 腰、勝手に動いて……ああん！」

亜季も舌を伸ばして口づけに酔い痴れる。ついさっきまで舌使いなど知らなかった彼女が、快感の本能に操られ、くねくねと顔を捻じりながら激しく舌を絡ませる。

「あ、ふあ……キス、気持ちいい……おちんちん、気持ちいい……」

厳格な風紀委員は、セックスの快感に蕩けた笑みを浮かべた。渉が乳房を揉むと切なげに肢体をくねらせる。乳首を摘むと、唇と膣口がキュッと締まった。

「僕も、気持ちいいよ……ああ……ああ……もう、出……そうだ……！」

挿入時に最高潮まで滾っていた肉棒は、強烈すぎる締め付けに、早くも限界を迎えようとしていた。

「ふああん……渉くん、渉くうん！」

しかし、初挿入の衝撃に酔った亜季は話を聞いていない。うねうねと腰をくねらせ膣肉で勃起を扱き、渉を危機に追い込んでいく。このままでは、彼女の中に出してしまう。

「ああう！ あ、亜季ちゃん、抜いて！ 出る……あ、ああ出るっ！」

「いいのお！ 中に……中に出してっ。渉くんの、ちようだい！」

どこまで理解しているのかも怪しいが、もう腰を止められない。絶頂をめがけて、犯すように彼女の恥肉で勃起を擦る。亜季も激しく腰を振って射精を促す。彼女の腰がカクン



と跳ねた。柔肉がずるつと裏筋を擦る。熱い粘液が肉棒を膨らましながら駆け上がる。

「あがああッ！ イク、亜季ちゃん、いくイク……ああ出る、イク……出るッ!!」

——びゅるう！ どくどく、びゅるびゅる、どびゅうううう！

激しく飛び出した精液が子宮口を叩いた。熱い射精液を胎内にぶち撒けられ、亜季の身体も大きく仰け反る。

「あ……あ……！ 涉くんのが……入って……あ、あ……!!」

まるで身体の中で精液を味わっているように、ヒクヒクと身体を痙攣させながら両手足をしがみつかせてくる亜季。ロストバージンの痛みのせいで絶頂には至っていないはずなのに、胸を揺らしながら短い呼吸を繰り返す。

「は……は……あ、亜季ちゃ……ん。あ……はああ……。ご、ごめん、中に……」

射精快感で脱力した涉の身体を、彼女は優しく受け止めた。処女を失った彼女の方を氣遣わなければならないのに、これでは逆だ。しかも、我慢できずに中出し。だが彼女は唇にチュッと軽く口づけ、微笑んだ。

「大丈夫。今日は、その覚悟で来たんだもの。だから……嬉しい……」

「亜季ちゃん……」

繋がる部分を盗み見る。シートに、赤い斑点が落ちていた。破瓜^{はか}の証に胸が締め付けられるが、幸せそうな亜季の笑みに救われ、涉は彼女と、何度も深いキスを交わした。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

竹内けん

Takent Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!



Now On Sale!!

A5判/定価990円(税込)



特設サイトはこちらからアクセス!!



<http://ktcom.jp/harem/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

<http://ktcom.jp/>

- モバイル二次元
ドリーム
- <http://www.2d-dream.jp/>
- 

二次元ドリームノベルズ
が携帯電話で読める！
携帯サイト限定の書き下
ろし小説もあるよ！